

## M16b 太陽用マイクロレンズ面分光データの解析について

末松芳法（国立天文台）

太陽表面で起こるジェット現象やフレアなどのダイナミック現象を的確に捉え、現象の正確な物理量を導出するためには、2次元同時（面）分光を行う必要がある。このため、マイクロレンズアレイを用いた面分光観測手法を実現し、分光器スリット前に付加光学装置を取り付けることで、彩層現象検出に役立つ水素のスペクトル線 H $\gamma$  線（656.3nm）波長域で活動領域の観測を実現している。この手法は、マイクロレンズと波長の重なりを防ぐ透過幅の狭いブロッキングフィルター以外は、特別な光学系が必要なく、既存の太陽望遠鏡と分光器に適用できる利点がある。一方、マイクロレンズが作る瞳をスリットの役割を果たすため、マイクロレンズ個々の光学特性、ブロッキングフィルターの局所的な分光透過特性により、個々のスペクトルは特性が違ったものとなる。特に、得られたスペクトル線の解析を行うには、ブロッキングフィルターの分光透過プロファイルの影響を取り除く必要がある。これらスペクトルの較正では、太陽面中心を一様光源とみなし、構造の影響をなくすため、望遠鏡を動かしながらデータを取得平均し、マイクロレンズの瞳の大きさによる波長分解能劣化を考慮したものを、太陽スペクトルのアトラスと比較する。この手法と得られた結果について説明する。